

外来化学療法室で治療を受けられる患者さんへ

1. 化学療法とは

化学療法は、抗がん剤の点滴や内服により、抗がん剤が血流に入って全身を巡ることで、がん細胞を攻撃する全身的な治療です。つまり、原発巣であるがん細胞だけでなく、まだ画像に写らないくらいの微小ながん細胞や転移したところにも、抗がん剤が血流にのって届けられていきます。その結果、がんが小さくなったり、転移や再発を予防することを目的とした治療です。病気の種類によって治療は異なり、スケジュールも違います。主治医が患者さん一人一人に計画を立てて治療していきます。



2. 副作用はなぜ発現するのか

抗がん剤が全身を巡る際に、がん細胞だけでなく、正常な細胞にも入っていくため、内臓や粘膜、神経、皮膚、毛根、骨髄などに影響を及ぼします。正常細胞が影響を受けると、吐き気や下痢、口内炎、発熱、脱毛、しびれといった症状が現れます。また骨髄に影響が及ぶと白血球や赤血球、血小板が減少します。この反応が副作用と呼ばれるものです。抗がん剤は正常細胞にとっては毒であり、副作用はその毒に対して正常細胞が反応を起こして、異常を知らせてくれるサインとして考えることができます。



3. 化学療法を受ける時には

1) 意識して自分をいたわりましょう

病気前の多忙な生活と全く同じようにしようと頑張りすぎないようにしましょう。また、散歩やショッピング、趣味の活動で気分転換を図ることや、家族や友人とゆったりした時間を過ごすことも良いでしょう。

2) 副作用と上手く付き合っていきましょう

薬の種類や量により、副作用はまちまちです。副作用は誰もが経験するわけではありません。症状にも個人差がありますし、辛い症状を我慢することはありません。副作用が発現した時の対処方法などを確認して、自宅に対応できるように備えておきましょう。

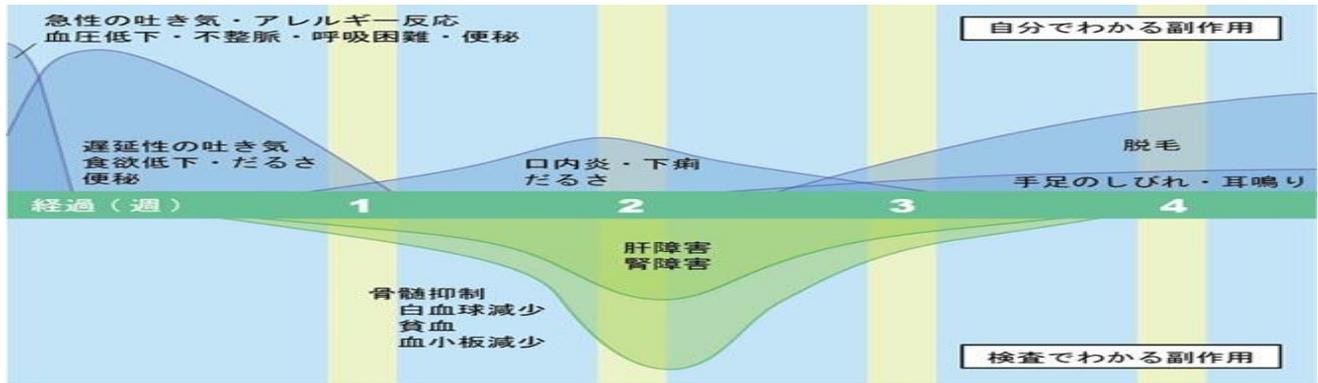
3) 担当医師、看護師と力を合わせて治療していきましょう

治療を受ける日は、あなたの体調について担当医師に詳しくお話してください。治療とは関係ないと思って症状を言わずにいたり、一人で我慢したりせず、体調が悪い時は教えてください。心配なことやわからないことなどは、遠慮なく、担当医師や看護師にお尋ねください。

4. 副作用発現時期の目安

副作用には、発現する時期があります。どの副作用がいつごろ現れるのか、おおまかにつかんでおきましょう。(ここに挙げた副作用がすべて発現するわけではありません)

期間が限定される副作用	正常細胞が抗がん剤の反応を受けて一時的に発現するもの(例: アレルギー反応、悪心、嘔吐、下痢、便秘、口内炎、骨髄抑制など) 副作用の対処を行います。
持続的な副作用	治療を続けている間、持続的に発現するもの(例; しびれ、脱毛など) 治療をやめると、症状が改善してきます。しびれについては、改善しても治らない場合があります。



自分でわかる副作用	自覚症状があるもの。 ご自身で自己申告しないと、医療者は把握することができません。いつ、どのぐらいの副作用が発現したか報告しましょう。(治療日誌を活用しましょう！)
検査でわかる副作用	血液検査で変化が現れるもの。白血球、赤血球、血小板、肝機能、腎機能など。結果によって、治療を中止したり、延期したり、抗がん剤を減量することがあります。ご自身でもデータを把握するようにしましょう。

5. 病院への緊急時の連絡方法について

副作用には、程度はさまざまですが悪心や食欲不振など発現頻度の高いものから、肺障害などの発現頻度の低いもの、また、自宅に対処できるものから、自宅では対処困難で入院が必要なものなどがあります。

どのような状況で、病院に連絡する必要があるかについては、医療者に説明を受けて、対処が遅れないようにしましょう。

- * 例えば・・・嘔吐が1日に頻回にある場合、吐き気止めの効果がない場合
- 食欲不振で、2～3日の間ほとんど食事水分もとれない場合
- 38℃以上の発熱がある場合 など



【電話連絡する時にお話ししていただきたいこと】

病院電話番号 (代表) **052-991-8121**

- ① 氏名・診察券の患者番号(7桁の番号)・診療科・担当医師名
- ② 治療した薬の名前・投与日(治療後の日数)
- ③ 症状(副作用の種類と程度)
- ④ 病院からの距離(来院の所要時間)

6. 連絡・お問い合わせ先について

* 平日：午前9時00分～午後5時00分は、担当診療科に連絡をしてください。

* 夜間、土曜日、日曜日、祝日などは、時間外受付に連絡してください。救急外来で診察させていただきます。尚、救急外来の場合は、当直医師の対応となりますので、ご了承下さい。



名古屋市立西部医療センター 外来化学療法室